

28. 山菜の林地導入試験

西澤敦彦

〔目的〕

東京都における、山菜の林間栽培による複合林家経営の方法を確立する。本年度は、都内における山菜の市場・林地栽培状況を調査した。また、都内の林家に山菜栽培を普及する場合、農業的な集約栽培でなく、粗放栽培である必要があると予想されるので、粗放的な管理で栽培をした場合の山菜収穫（インパクト）後の変化を栽培試験した。

〔方法〕

1. 山菜の市場・林地栽培状況の調査：西多摩地区の市町村役場、農業改良普及所、林業改良指導員、林家、キャンプ場、農協直売所、地方卸売市場、中央卸売市場を調査した。
2. 栽培試験：林業試験場（五日市町）内の畑地及び日の出試験林のスギ12年生（密度：2800本/ha）の林床に、相対照度（RI）の異なる試験区を図2-0のようにそれぞれ3種類設定した（畑地のRIは、寒冷紗で調節した）。昨年植栽した表-1の山菜（材笹納シ、クワツ）について、5月下旬から6月の時点の生長量（一株中の葉数および最大葉長）を測り1試験区毎に約半数をナイフで採取し、10月に再度生長量を調べた。

〔結果〕

1. ・都内ではワサビを除いて林地の山菜栽培で収入をあげている事例は見つからなかった。その理由として、林地栽培は、ハイカー等による盗難の危険が高いこと、管理や収穫する人手がないことをあげる人が多かった。また、かつてワラビ栽培をしていたが、数年で品質が低下し放置してしまっただけの事例は、栽培方法の知識が不十分であることが要因と思われた自家用として、ミョウガをスギ林内に栽培し、隣近所親戚に配っていた事例はあった。

・地方卸売市場では、野菜全品目（全野菜）の場合、中央卸売市場からの平均転送率9.2%に対して、山菜の場合、品目によっては100%近いものもあるので、純粋な入荷統計は得られ難いことが分かった。また、このことは需要に対して地元の供給量が殆どないことを示している。青果物流通年報による東京中央卸売市場動向を図1-1～11に示す。1993年現在年報で扱っている山菜の品目としては、「わらび」「山うど」「たらの芽」「その他山菜類」であったが、他に今後東京で林内栽培できると思われる品目として、「みょうが」の動向も見てみた。なお、図中「全山菜」とは、「わらび」「山うど」「たらの芽」「その他山菜類」の合計であり、「みょうが」は含まない。図1-1で全野菜および山菜・ミョウガの取扱い数量の年次推移を見ると、昨年夏の旱魃でミョウガの取扱量は、前年の4

表-1 山菜の栽培試験区

五日市町試験場畑地（寒冷紗による照度調整）

山菜名 試験区	オオバギボウシ			クサソテツ		
	面積(m ²)	株数	RI(%)	面積(m ²)	株数	RI(%)
対照地	3.0	22	100.0	3.0	15	100.0
A	3.0	22	5.9	3.0	18	5.9
B	6.0	39	0.7	6.0	33	0.7

日の出試験林（スギ12年生2800本/ha(植栽時3000本/ha)の林床）

山菜名 試験区	オオバギボウシ			クサソテツ		
	面積(m ²)	株数	RI(%)	面積(m ²)	株数	RI(%)
A(下)	4.0	26	6.0	4.0	18	2.1
B(中)	4.0	22	2.2	4.0	12	0.8
C(上)	4.0	39	2.0	4.0	14	3.1

五日市町試験場畑地

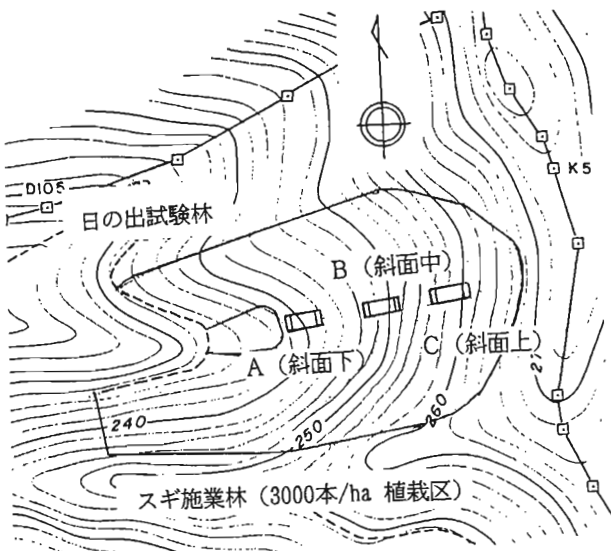
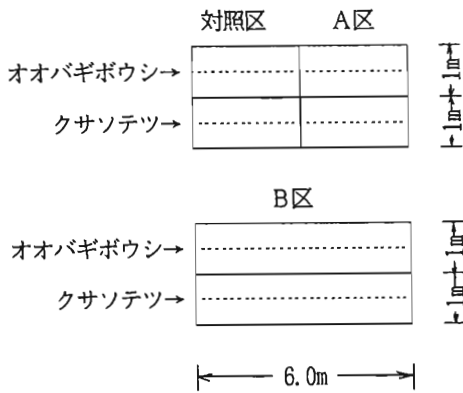


図2-0 試験区の設置状況

削減となったが、それ以外の山菜も数量に関してはいずれも過去5年間で横ばいか微減であった。次に、全野菜に対する取扱い数量のシェアを図1-4で見ると、①ミョウガも全山菜も0.1%前後の低水準であった②全山菜はヤマウドが6割を占めておりヤマウドの推移に連動してシェアが微減した③全山菜の内ヤマウドを除いたワラビ・タラノメ・その他山菜は殆ど過去5年間横ばいであったことが分かった。なお、タラノメは1991年に単独の品目として扱われることになり、取扱い数量・金額が高くなったことを示している。図1-2で全野菜および山菜・ミョウガの取扱い金額の年次推移を見ると、図1-1の「数量」と比較して全体に右上がりとなっている。そこで、全野菜に対する取扱い金額のシェアを図1-5で見ると、①ミョウガも全山菜も0.3~0.4%であり「数量」に比較して3~4倍水準があがっていた②ミョウガは過去5年間横ばい、山菜は微増で推移した③全山菜に占めるヤマウドは3割程度に留まった④ワラビ・ヤマウド・タラノメはほぼ横ばいであるから1992年にその他山菜類の中で金額を伸ばしたものがあることが分かった。「数量」で微減なのに金額で微増となったのは、ミョウガ・山菜の単価が高水準のためである。図1-3に全野菜および山菜・ミョウガの平均単価の年次推移、図1-6に全野菜に対する山菜・ミョウガの平均単価の倍率を示す。ヤマウドで全野菜平均の2倍、ワラビで5~7倍、ミョウガで4~7倍、タラノメでは実に13~20倍の年平均単価となっている。平成3年度の資料によると、全野菜128品目のうち単価が1000円を超えるのは28品目で、そのうち10品目が山菜・ミョウガ・わさび・きのこ類である。単価の水準が高いのは、需要に対して供給が追いつかない状況であると考えられる。今後山菜が農業化野菜化して供給量が増えた場合、単価の下落が懸念される。次に、山菜・ミョウガの最近5ヵ年の月別取扱い数量および月平均単価を図1-7~11に示す。ミョウガ以外の山菜は、どれも出荷数量が最大の月の単価は一年を通じて最低の水準とはなっていない。つまり、「旬」の価格が維持されている。一方でミョウガは、昨年8月は早魃で出荷数量が5月並みになったのかかわらず単価は例年どおりの低水準となった。また、数量と単価が反比例になって連動しているので、供給が飽和状態になりつつあるようだ。ただし、初夏の6~7月を「旬」と考えるとまだ余地はあると考えられる。山菜は季節感のある食品として、季節外の出荷を抑え、売り方も市場をむしろ通さない方が良いのではないか。

2. 栽培試験結果を図2-1~8に示す。今年の春の萌芽は現時点でまだなので、とりあえず昨年秋までの結果である。オオバギボウシは採取後の生長はRIによらず、良好であった。日の出試験林試験区では、萌芽した葉の数はむしろ採取処理した方が多くなった。ただし、花がさいたのは五日市町畑地のRI=100%区のみであった。クサソテツは、RIによらず採取後に展葉しないものが多く、採取後の生長が悪い評価となった。採取時期が悪かった可能性もある。RI=100%区は周りの雑草に被圧された。

3. 山菜の潜在的需要はかなり余裕があると考えられる。地の利のある都内において、市場出荷とは異なる方法による山菜の林地経営を今後模索してみたい。

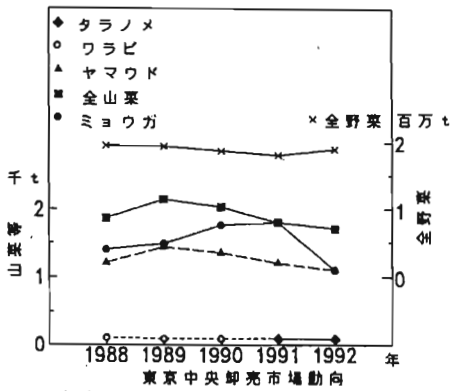


図1-1 全野菜および山菜等の取扱数量

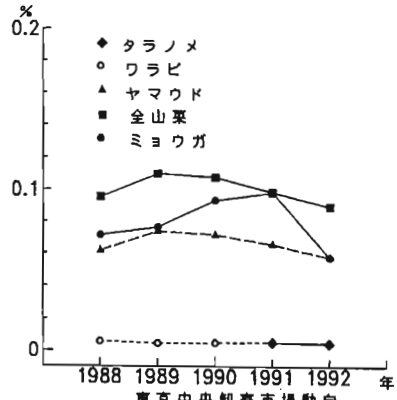


図1-4 全野菜に対する山菜等の取扱数量のシェア

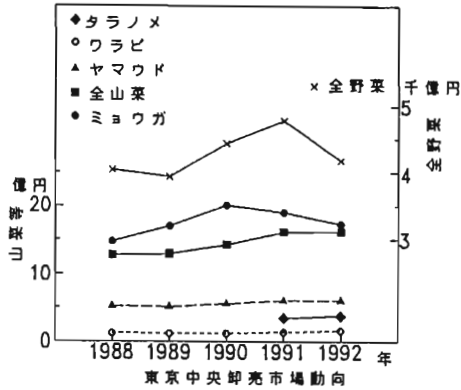


図1-2 全野菜及び山菜等の取扱金額

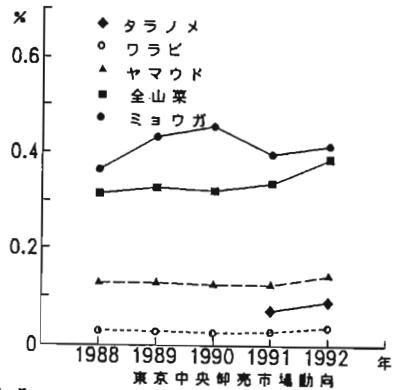


図1-5 全野菜に対する山菜等の取扱金額のシェア

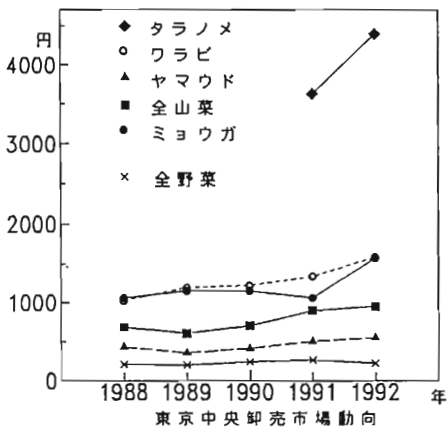


図1-3 全野菜および山菜等の平均単価

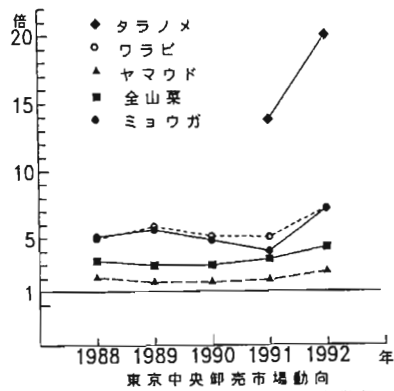


図1-6 全野菜に対する山菜等の平均単価の倍率

注：「全山菜」とは、品目の「わらび」「やまウド」「たらノメ」「その他山菜」の合計であり、「みょうが」は含まない。

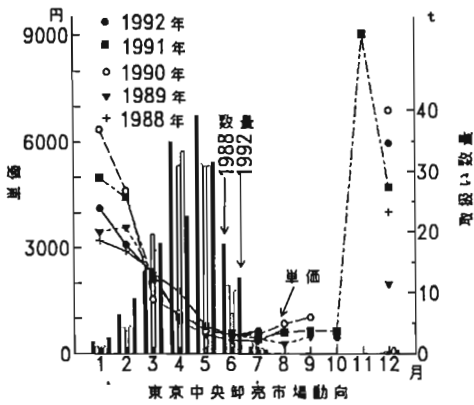


図1-7 最近5年間のワラボの取扱い数量及び単価

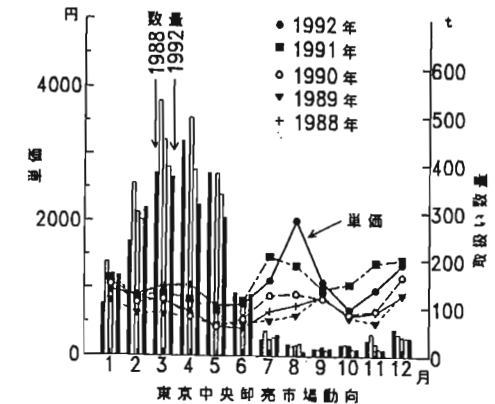


図1-10 最近5年間の全山菜の取扱い数量及び単価

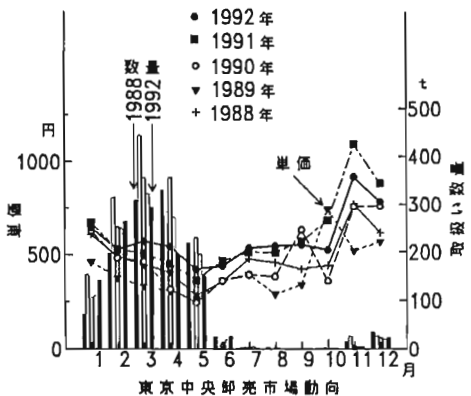


図1-8 最近5年間のヤマモトの取扱い数量及び単価

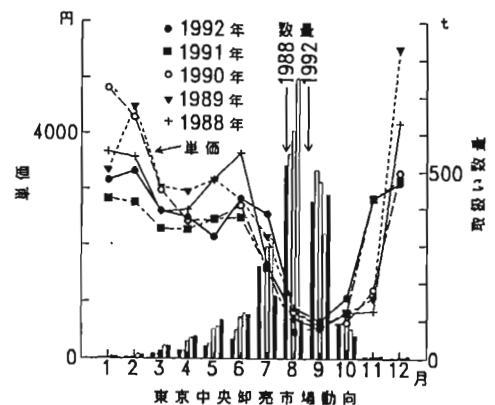


図1-11 最近5年間のミョウガの取扱い数量及び単価

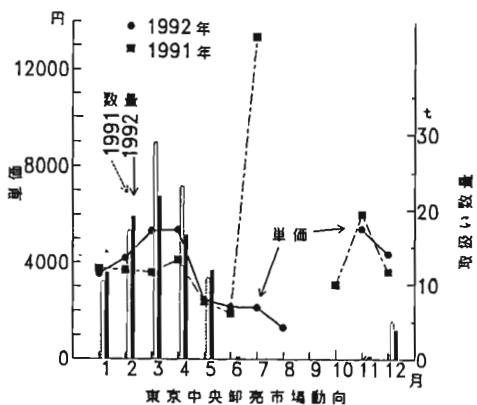


図1-9 タラノメの取扱い数量及び単価

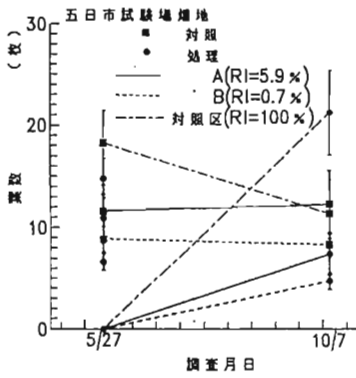


図 2-1 オオバギボウシの生長量

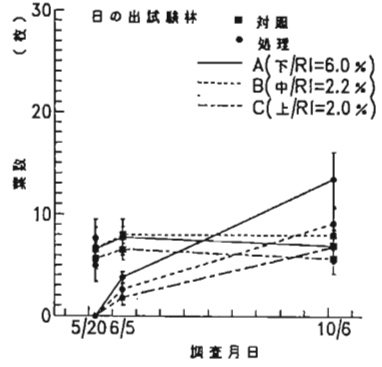


図 2-2 オオバギボウシの生長量

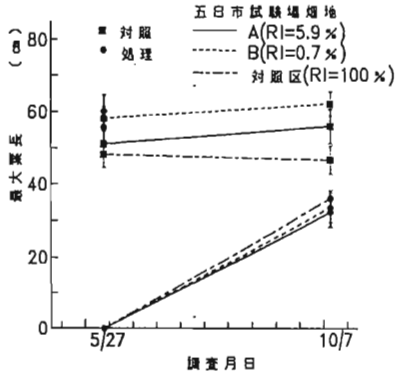


図 2-3 オオバギボウシの生長量

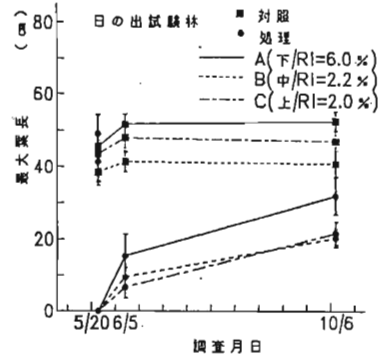


図 2-4 オオバギボウシの生長量

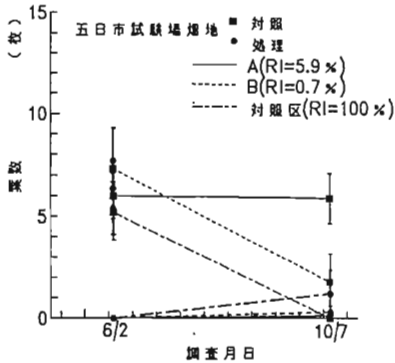


図 2-5 クサントツの生長量

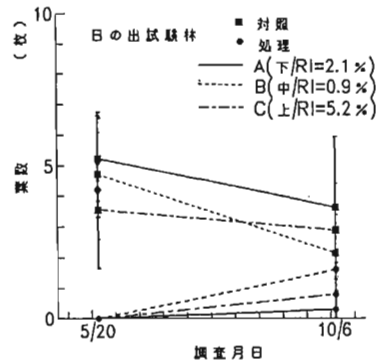


図 2-6 クサントツの生長量

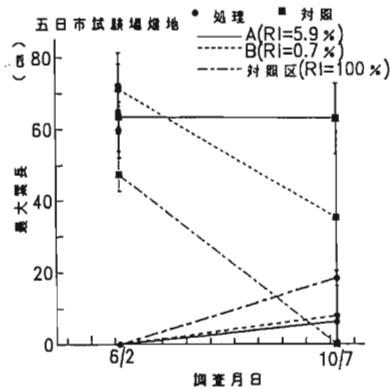


図 2-7 クサントツの生長量

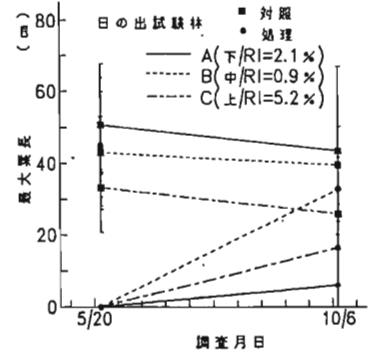


図 2-8 クサントツの生長量